

スクールカウンセラーとの連携を生かした教育相談的アプローチ

スクールカウンセリングを生かした人間関係づくり

1 なぜスクールカウンセリングなのか

不登校、場面緘黙、学習障害、自閉的傾向、反社会的な行動（喫煙や飲酒、暴言、反抗、授業妨害、授業エスケープ、いじめ、暴力、規律の乱れなど）・・・・・・集団の中で孤立しがちな子ども、落ち着きのない子ども、学級の雰囲気乱す子ども、攻撃的な子ども、勉強ができない子ども、嘘をつく子ども、無気力な子ども・・・・・・担任をしていると「手を焼く」生徒や「気になる」子どもが大勢います。そんな彼らに、自分は担任として本当に力になれたのだろうか、自分は一体何をしていけばいいのだろうか、目の前の生徒たちにどのような姿勢でどう関わればよいのか・・・・・・自分自身の指導の意味に不全感を感じたり、期待するような変容を見せない生徒の姿に心もとない感じを覚えたりすることがよくあります。

これらは、子どもたちが抱え持つ問題であると同時に、家庭・保護者の問題でもあり、学校や教師が抱え持っている問題であるとも言えます。

※

子どもたちは学校の内外の様々な人たちに、様々な形でサポートされています。

粘り強く家庭訪問を続けることで信頼関係を築いていく担任、けんか腰でぶつかりながら深い人間関係をつくりあげていく教師、自信や存在感を失いがちな生徒が授業で活躍できる場面を何気なく作る教科担任、弱った心を温かく包み込む養護教諭、一人でいる時間を求める生徒に安心して過ごせる場を提供するほほえみ相談員・心の教室相談員、活躍の場を部活動に求める生徒に生きがいと充実感を持たせる部活動担当の教師、登校を渋りがちな生徒にさりげなく手を差しのべる学級や班の仲間などなど。

こうしたサポート・ネットワークの一部分を形成するものとしてスクールカウンセラーの活動が位置付けられています。他のサポートとも関連して、子どもの問題、学校・教師の問題を未然に防止する予防的な働きかけや、危機やストレスに対処できる力の発達を促す成長促進的な働きかけが期待されています。

2 「心の専門家」の力量を

臨床心理士（スクールカウンセラー）の生徒の心の問題へのアプローチは、指導型の教師とは違う発想を持っています。臨床心理士は、一人一人の心の世界を大切に、表に表れた行動や症状の意味に着目し、それを解釈学的にアプローチします。また、心の世界を共感的に理解し、相手の心に参加する意識を大切にします。さらに、人の成長・成熟を見守り、待ち、支える姿勢を持っています。人にある行動をとるように指示・指導するというより、その人が自分の心の内面に目を向け、自己に気付くことを大切にさせます。そして、表に表れた行動の背後にある本人の気付いていない心の影の世界の理解に目を向けています。

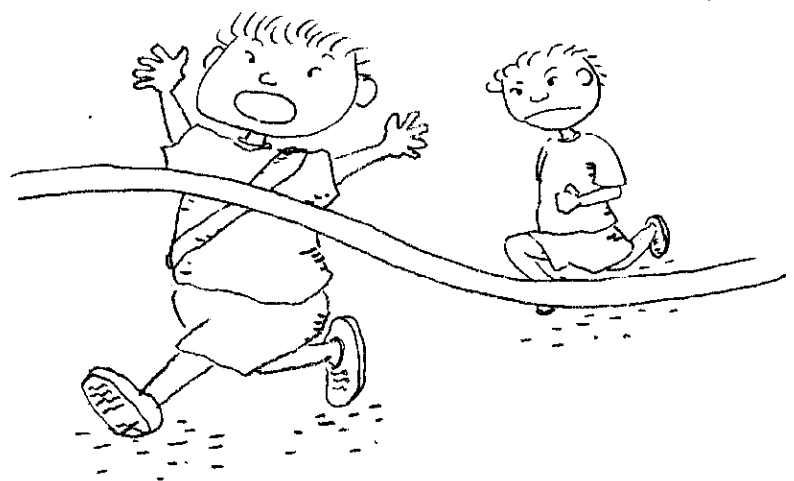
この発想は、生徒の問題行動に対する時、「どう働きかけ、対処しようか」とすぐに対処方法に飛び付くのではなく、問題行動は当面の生徒にとってどういう意味があるのか、本人はどう理解し感じているのか、さらに、この生徒の問題行動は教師や学校に何を問い掛けているのか、その意味は何かをまず考えます。問題行動を起こしている生徒を心の成長・発達の視点でとらえ直し、その生徒自身の気付きと心の成長を促進するよう支えていくアプローチをとることになります。

一般的な教師とは異質な臨床心理士（スクールカウンセラー）の存在は、子どもたちやその問題行動、あるいはその要因について、様々な味方ができることを教えてくれるものです。

3 スクールカウンセラーとの連携による心理教育的援助サービス

スクールカウンセラーと学校（教師）との連携の対象になる子どもの状況には、様々な段階があります。まとめてみると下の表のようになります。子どもの状況に応じた援助の在り方が求められます。

一次的関与	すべての生徒が持つ発達上の援助ニーズに対応する。予防的サービスと発達促進的サービスがある。関与の主役は教師であり、スクールカウンセラーは必要に応じて心理テストなどを行い、その結果を基にしたコンサルテーションなどを通して教師を援助する。
二次的関与	登校を渋り始めた生徒など、問題を持ち始めた生徒（援助ニーズの大きい生徒）に働きかけ、問題が重大化しないようにする。関与の鍵は教師が握るが、必要に応じて援助チームを結成する。
三次的関与	長期欠席やLDなどにより個別な配慮と援助が必要な特定の生徒に対するサービス。教師がなかなか入り込むことのできない家庭の問題も絡むことがあり、スクールカウンセラーの対応によって生徒の世界の全体に関わろうとしていく。援助チームで取り組み、担任、養護教諭、カウンセラー、外部機関などがそれぞれの立場で力を尽くす。



4 スクールカウンセラーとの連携によって軽くなる教師の精神的負担

問題性のある行動をとる子どもを教師だけで抱え込もうとすることで、教師の精神的ストレス（無気力感や罪悪感）が高まる場合があります。ともすると、無気力感・罪悪感を感じている子どもの状態と教師の波長が合ってしまい、目の前の子どもに対して、教師が生き生きと接することができなくなることもあります。教師自身が生き生きとしていない状態は、子どもたちにマイナスの影響を与えてしまいがちです。

逆に、教師が精神的な負担を抱え込まず、生き生きとしていることは、教師の感受性が目覚めている状態と言えます。そういう状態の教師であれば、目の前の子どものちょっとした変化をとらえることができ、「先生は私をちゃんと見ていてくれる」という子ども（保護者）の安心感・信頼感につながります。また、問題性のある行動を起こした子どもに対しても、教師の個性を存分に発揮してぶつかっていくことができます。

① 教師にはない専門性を発揮するカウンセラー

- 助言に説得力がある。
- 教師にとってのカウンセラーでもある。

② 相談の内容に真剣に心と耳を傾けるカウンセラー

- 相談者の味方・理解者としての存在が心強い。相談者の心の負担が軽くなる。
- その後の教師と保護者、教師と生徒、生徒と保護者の会話が円滑にできる。

③ 問題を整理するカウンセラー

- 子どもや親の心をどう見るかが示される。
- 問題の本質がどこにあるのかが示される。

④ 方向を示すカウンセラー

- 各々の立場で（必要に応じて関係機関との連携を図る）努力すべきことが明確に示される。
- これからやろうとすることに自信が持てる。

⑤ 継続的に相談できるカウンセラー

- 相談者のことを知っていてくださるという安心感がある。
- 長期的な指導ができる。

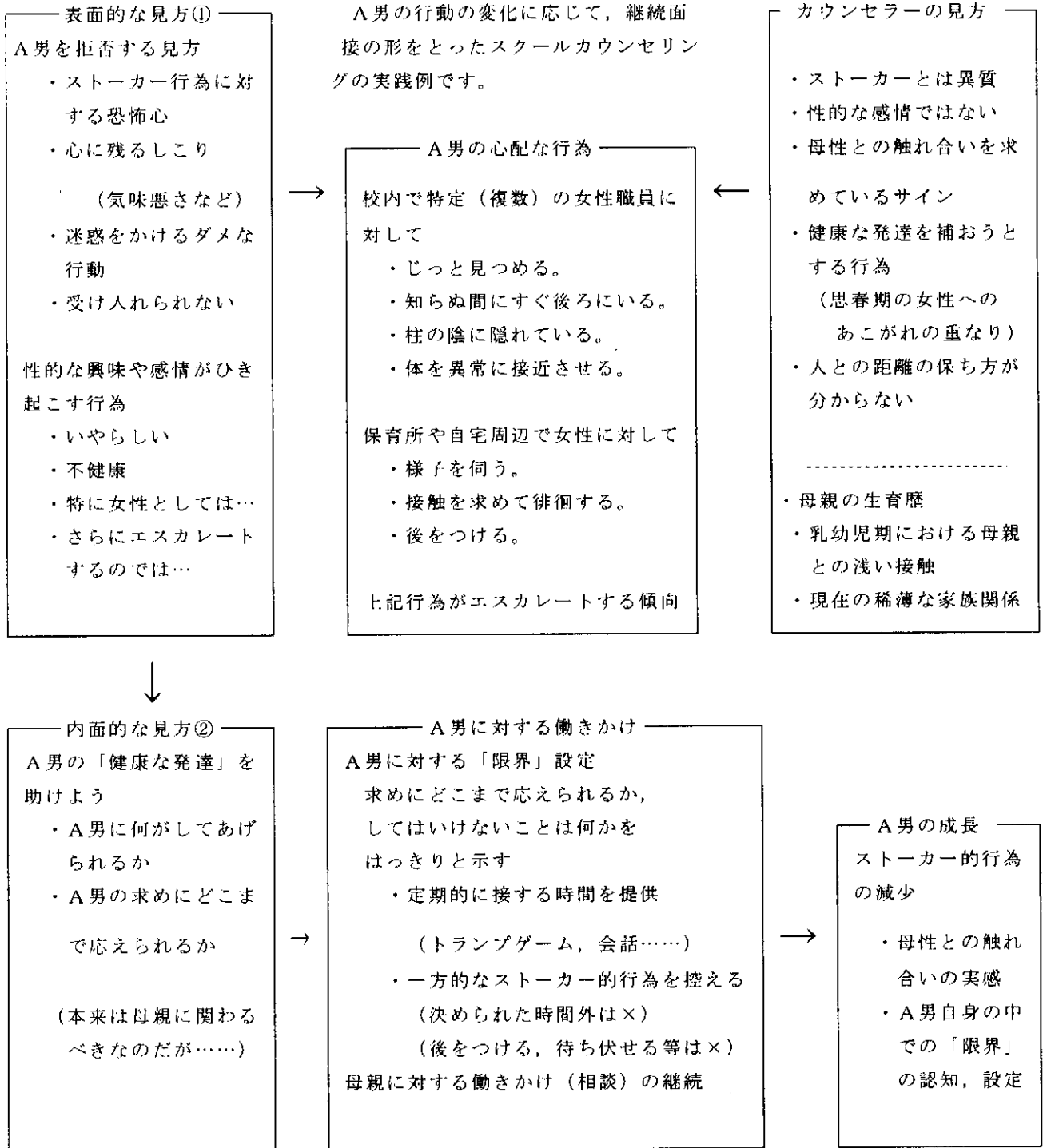
⑥ カウンセリングの勉強ができる教師

- どんな接し方が望ましいのかが見えてくる。

5 相談活動の実際

(1)事例Ⅰ 子どもに対する教師の見方が変わった

～ ストーカー的行為を繰り返すA男 ～



スクールカウンセリングによって、A男の行為に対する教師の受け止め方に变化(上記の見方①が見方②に)がもたらされました。

A男の精神的な要求を満たすための教師の接し方が求められます。けれども、教師の負担やストレスを考え、安心して接することができる「限界」をきちんと持つことです。継続できる援助のしかたを明らかにしました。

A男が安心(精神的要求の満足)できて、かつ我慢もできる範囲を示したことで安定と成長につながりました。

(2)事例Ⅱ 学校だけで支えない

～ 不登校傾向の著しいB男 ～

スクールカウンセラーが、学校と外部機関との橋渡し役をすることで、連携をとりやすい関係を作った実践例です。

B男の心配な状況

連絡のない欠席の繰り返し

- ・担任の働きかけ方を変えると、しばらく登校できるものの長続きしない
(テレホンカードを渡して連絡の約束)
(夕方・夜の家庭訪問)
(朝の家庭訪問)
- ・不規則な生活、ゲーム漬けの生活

B男曰く「絶望的な家の状態」

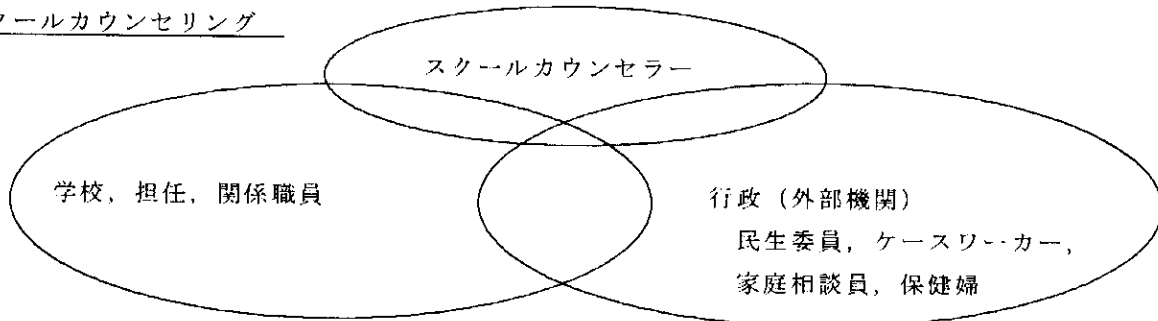
- ・母子家庭
- ・定職を持たず、パチンコ店通いを続ける母親
- ・弟も保育園に通わせていない状態
- ・「家事をB男にやらせたい」「B男に家事や弟の面倒を任せておける」という気持ち
- ・「厳しくしている」という言葉とは裏腹の放任
- ・家の中は清潔とは言えない、かなり乱れた状態

(※担任・学校の指導・援助の限界)

↑

↑

スクールカウンセリング



- ・基本的な生活リズム・パターンの未定着
- ・基本的な生活能力の欠如
(神経症的な不登校との違い)
↓
- ・行動療法によって行動の仕方を教える。
(「まともな大人の姿」「社会で生活するといふのはこういうこと」を教える。)
- ・登校への援助を続ける。

- ・家庭（母親）の養育能力の欠如
↓
↓
↓
- ・母親自身の就労を促す。
- ・学校、保育所に行かせるように働きかけを続ける。
- ・生活必需品の購入など、必要な援助をする。

B男の行動の様相や彼を取り巻く状況を考えると、他機関との連携を図る必要がありました。スクールカウンセリングによって、それぞれの立場からの関わり方を明らかにしました。その後も、家庭相談員がコーディネーターとなって連携をとりながら、主に学校（担任）がB男本人に、保健婦が家庭（母親）に関わっていくという組織的、継続的な場を設けて援助を続けています。

6 子どもの様相をどう見るか

特徴的な問題行動をとる子どもたちに共通する点として、情緒的な未成熟をあげることができます。特別な子ではなく、幼見的傾向（「面白いからやる」という行動パターン）の強い子どもたちであると言えます。子どもたちの情緒的な未成熟の問題は、乳幼児からの成長過程における経験の問題です。その視点を整理してみると、次のようになります。

- ①乳幼児期における親子（母子）関係……愛情要求が十分に満たされていない子ども
- ②核家族化・少子化の中での家族関係……家族関係での経験（特に兄弟間のじゃれ合いやけんかなどの経験）の偏りや不足
- ③家庭での生活様式の変化としつけ……家庭の生活様式（家族文化）の変化、しつけ教育の軽視
- ④情報化社会での行動の一様化……社会の風潮や流行（特に合理主義、能率主義、簡便主義、手抜き文化など）の影響
- ⑤マスコミ文化の発達とその影響……テレビ、ビデオ、テレビゲーム、漫画などの影響
- ⑥地域社会の変貌、家庭の孤立化……地域社会の伝統や文化の変化、地域社会と没交渉、孤立化している家庭
- ⑦子どもの世界の喪失……優越感の調整や劣等感の克服の経験不足
子どもどうしの協同意識や連帯感、自治意識などを身につける機会の減少
- ⑧豊かな物質生活……興味や関心の持てる選択肢の豊富さ、価値観の多様化

スクールカウンセリングでは、成長過程での経験が現在の子どもの生活とどう関わっているかを問題として、教育相談的なアプローチを行います。問題の根を長期間にわたる生育の過程に位置付けようとしています。その際、子どもを発達のにとらえます。誰もがどこかが未熟であり、どこかで必ず傷を負っているものだととらえるのです。子どもの発達は将来に伸びていくものであり、子どもが示す問題行動もそのきっかけになるととらえます。その際に重要なことは、次のことです。

*「表面的に問題と映る行為も、実は問題行動ではない」という見方が必要である。

問題行動を困ったこととして受け止めるのではなく、解決・答えを求めているサインだと受け止める姿勢が大切だということです。

*「平均からの逸脱」という視点ではなく、「個性」で目の前の子どもを見ることが大切になる。

子どもが何故そのように考えたり行動したりするのかを探ることが大切です。教師一人が子どもと関わることは一方的な見方に陥りやすいものです。教師とは経験や立場、職種の違うスクールカウンセラーの角度の違う見方によって、問題行動としてしか映らなかった（見えなかった）子どもの様相が見えてきます。それによっていろいろな角度から子どもを支えることも可能になります。教師（学校）とスクールカウンセラーとの連携が大切になるわけです。

<参考文献>

『スクールカウンセリング事典』（國分康孝編 東京書籍）

『スクールカウンセラー その理論と展望』（村山正治・山本和郎編 ミネルヴァ書房）

『学校カウンセリング実践講座9 生と性のヘルスカウンセリング』（武田敏・弘中正美編）